

《講義一》

人間の問題の本質

どうもこんにちは。たいへん天気がいいのですが、コロナで大変出にくいところをよく出てきて下さいました。心から敬意を表します。

『教行信証』もこの間から、「総序」が終わって「教の巻」、ですから『教行信証』の内容に入っているわけです。皆さん、なかなか難しいだろうなと思います。私も大学に行きまして、仏教を学問として勉強するということに違和感をおぼえていました。学問というようなことではなくて、もう少し身近に生活感覚のところでした。てくさつたら、こつちもよく分かるのになあと思っておりました。ですから大学院に行く頃、いつそのこと専修学院に行つて実践的な仏教を学んでいこうかと思つて、先輩に相談をいたしましたら、「ちゃんと勉強しろ」とえらく怒られて、まあ仕方なく大学院に行つたのです。けれども、今言うように、なにかもう少しストレートに、この宗教というものを、生活の中にズカッと切り込んで問題にしてくれたら分かりやすいのになあ、とずつと思つておりました。

よくよく考えてみますと、例えば生活感覚のところではいろんな問題が起りますね。皆さん方、たぶん家族の間とか、隣人の間とか、あるいは夫婦の間、親子の間、いろんな形で問題が様々あると思います。しかし、それに一つひとつ答えているとお釈迦様は体がな

んぼあつても足りない。それで学問と言うのは、そのように様々に皆さんがをお持ちの問題を、少し昇華してというか、生活の場から少し上げて、そして、とり上げたらいつぱいある問題が全部包めるというか、うまく言えませんが、分かりますね。

それぞれの問題があるに決まっている。あるに決まっているんだけど、それに一つ一つ直接答えるというのではなくて、そこに問題になつてゐることは一体どういうことなのかということ掘り下げていつて、それでは親子の問題の究極的な問題はここにある、夫婦の問題もここにある、とすると、それはひよとしたら同じ問題ではないかというふうには、生活のところから起こつてゐる様々な問題を少し昇華していく。どんなことが起ころうと、ここにその本質があるのだというところまで昇華していく。そこで親鸞聖人が人間の問題にこたえようとしてゐるわけです。

ですから直接的にはなかなか分かりにくくても、宗祖が言おうとしてゐることをよく聞いて考えてみると「ああそうか。私のことを言つてゐるのだ。」というふうに分かつてくるときが必ず来ます。そういうふうな学問というものは、直接答えるわけではないけれども、それを少し上の方にまで昇華して、人間の問題ならここに本質がある、というところまで昇華して、すべての人間の問題を包み得るところ、そこを親鸞は答えようとしてゐるのです。

そういう方法をとつてゐるために『教行信証』を読んでもなかなか分かりにくい。「何を言つてゐるのだろうなあ」というふうに分かりにくいのです。けれども、まあ、死ぬまで勉強してください。死ぬ頃には分かります（笑）。「なるほど」と思つて感動することがあると思います。「自分は今まで気がつかなくなつたけれども、ああそういうことを言つてゐるのか」「それなら分かる」と思つて感動することが

ある。

それが解けたらこの問題はうまくいくのだというように、どうも私たちが見ている問題とは違うところから問題を見て、それに答えようとしているところがあると思います。

この間から「教の巻」に入っておりますが、今読んだように「教の巻」は全体が短いわけです。ですから今日は一度さつと復習をしたいと思います。まず

「**謹んで浄土真宗を案ずるに**」、ここに浄土真宗と言う宗名が出てきます。ですから、親鸞聖人は「**謹んで浄土真宗を案ずるに**、**二種の回向あり**。一つには**往相**、二つには**還相なり**。往相の回向について、**真実の教行信証あり**。」というふうには、最初から浄土真宗の特質を述べようとしているのです。

まずは一代仏教。私たちの聖典は「浄土真宗」の聖典ですけども、『教行信証』は大乗仏教全体に捧げていったわけです。だから、まず一代仏教に対してわが浄土真宗という仏教は他力の仏教であること。他力の仏教であると言っても、阿弥陀如来の本願力による仏教であること。その本願力に法蔵菩薩がご苦労して、私たちのような仏教が分からない者を何とかして、共に浄土に生まれたいというふうに、私たちが浄土に連れていこうとする往相というはたらきと、もうひとつは浄土から還つてきて、それを教化していくという還相というはたらき、この二つのはたらきによって成り立つ仏教、それが浄土真宗であると、まずこれを宣言しておられます。そして「**往相の回向について、真実の教行信証あり**」と、こういうふうには親鸞聖人が言われるわけです。

正定聚の位―お釈迦様の阿難との出遇いの意味

これは『大経』の下巻の一番最初に、本願の成就文というものが掲げられます。それは、この間、皆さんと一緒に拝読しましたお釈迦様の阿難との出遇い、あのお釈迦様と阿難との出遇いにどんな意味があるかということをお釈迦様が教えようとしているのが下巻です。

だから阿難に、まあ簡単に言えば、「阿難よく聞け」と、私と出遇つてあなたはこの世を超えたという感動をもった。その一番大切な感動は、まず聖典の四十四ページ、下巻の最初です。上巻のお釈迦様と阿難との出遇いを踏まえて、お釈迦様が阿難に、あなたが出遇つた仏教の確かさ、それからあなたが出遇つた仏教のすばらしさ、それを教えようとしているのです。

「**仏、阿難に告げたまわく**」まず最初に阿難に

「**それ衆生ありてかの国に生ずれば、みなことごとく正定の聚に住す。所以は何ん。かの仏国の中には、もろもろの邪聚および不定聚なければなり**」。

これは第十一願・必至滅度の願の成就文です。これは「もし衆生があつて浄土に生まれれば、みんな浄土で正定聚の位につきまます。なぜなら、阿弥陀の浄土には邪定聚や不定聚がないからです」という意味です。

そうするとこれは何を言っているかというところ「阿難、実はあなたは正定聚にいたのですよ」ということを教えている。だから『大経』で説く浄土は「死んでから浄土に行く」というのではなくて、お釈迦様と出遇つた時、あるいは皆さんが先生と出遇つた時、その時に浄土に生まれて、そして正定聚に住する、そういう位につくことができる。ただし、ただしですよ、身は凡夫だから、浄土に生まれてし

まったというとは仏様になってしまふから、浄土に生まれてしまったわけではない。しかし、今いただいている信心は浄土の覚りを開いて、その正定聚という位に立つことができる。「阿難、あなたは今正定聚に立つことができましたのですよ」とお釈迦様が教えていることになりました。いいですね、これも詳しく言いだすといろいろあつて、『論』『論註』から始まつてたくさんあるのですが、今はこれくらいにしておきましょう。

阿難がお釈迦様に遇つて感動したと、私はこの世にはないような大きな一如の世界に開放されたのだと。それはどういうことか。阿難は凡夫だから、実は、そのことは分からないわけです。だからお釈迦様の方から「阿難よく聞け。あなたが今感動して、そしてこの世を超えたというふうに思われるのはその通りだ。あなたは他力の信心によつて、本願を信じる信心によつて浄土の正定聚という位にいたのですよ」ということがまずあります。そしてその次に、

十方恒沙の諸仏の勧め

「十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功德の不可思議なることを讚嘆したまふ」。

「十方恒沙の諸仏如来」というのは、東西南北四維上下の諸仏たち「恒沙」というのは、皆さんインドに行つたことではありませんね。インドに行くといインドの人達はガンジス河のことを「ガンガー、ガンガー」と言います。あれです。「ガンガーの砂のように」と、「たくさんガンジス河の砂の数ほどの諸仏たちがあなた方に先立つて、阿難に先立つて、念仏の教えを説いてくださったからですよ」と。自分で努力して分かつたのではない。

私たちが仏教に触れる時に、努力して聞法することも大事ですよ。

ですけども、努力の先にもし覚りがあるというのなら、それは努力できる人の方が強い。努力できない人はだめなのです。ところが真宗は、むしろ努力できない人の方に重きがあるわけです。皆さんも考えたら分かるとおりに、今日、こんなコロナでね、これ普通怒られるよ、こつそり来ないと(笑)。「年寄りがそんなところに出て行くな」と言つて怒られるで。それでも来たいと思つてくるわけでしょう。そこまでお思いになつていふことは、それは、これまでに仏教に縁があつたのです。ご両親のご縁があつたり、おじいちゃんおばあちゃんのご縁があつたり、近くの仏教者の方に遇つて感動したり、そういうことがないと、私たちは仏教にご縁がありません。それを言つていふのです。

自分の努力とか能力とか、それから頑張つて覚りを悟つた、そんなことではないよ、と。阿難よく聞け、あなたに先立つてたくさんの方が、あなたの後ろから、念仏者になれと応援している。その声によつて私たちは育てられてきたのですよ、と言うわけです。分かりますよね。

私も自分のことを言うのは恐縮ですけど、今から考えると貧しい中で育ててくださった両親のおかげやつたと思います。それから周りに苦しんだおじいちゃんやおばあちゃんたちが、不思議やなと思うのですが、そういう人たちがだれ一人として「偉くなつてぼんちゃん食えるものにならないとどうにもならんよ」と言う人は一人もおらんかった。いやいや皆さん笑いますけど、うちは極貧だからね。食えなかつたから。だから心配してくださったら、そう言つてくださったでもいいのに、「ぼんちゃん大きくなつたら、親鸞聖人の教えを私に教えてください」と言つてばあちゃんたちがみんな私を育ててくれた。ばあちゃんが頭をなでてくれて、カン口飴を貰つたりいろ

んなことをした。それはうれしくてね、自分が好きなおぼあちゃん
がこれだけ喜んでくれるのだと思つて、やつぱり子供でなにも意味
が分からなくても、「ああ仏教つてやつぱりすごいのやな」と思つて、
いつの間にか育てられていったわけです。皆さん方一人一人みんな
そうだと思います。真宗のご門徒にお生まれになったということ
は、そういうことですね。それによつて育てられているのですよ。
そして最後には、

如来回向の信心によつて

「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念
せん。心を至し回向したまへり。かの国に生まれんと願ずれば、す
なわち往生を得て不退転に住す。唯五逆と誹謗正法とを除く」と。

ここははつきり「回向された信心によつて、阿難、あなたは仏様の
世界を知ることができたのですよ」と。如来回向の信心によつて、
分かりますね、私たちのもつ力とか能力とか、人はそれぞれいいも
のを持っています。愛情とか正義感とか良心とか。しかしそういう
ものをいくら振りかざしても、阿弥陀の浄土にはなりません。如来
回向の信心、人間の中にはないけれども、如来回向の信心、その信心
によつて「阿難、あなたは如来の世界を知ることができたのですよ」
と、お釈迦様が教えてくださっているわけです。

ここの最初の

第十一願・必至滅度の願は、親鸞聖人は「証の巻」に掲げています。
それから

第十七願の諸仏称名の願、それは「行の巻」に掲げています。

第十八願の回向に信心については「信の巻」に掲げています。

全体は『大経』ですから「教、行、信、証」すべて往相回向の本願

による。本願によつて教・行・信・証が成り立つということは、いい
ですか、これは一代仏教から言えば、他の仏教から言えば、凡夫は仏
教なんか歩けないと。凡夫はそもそも仏教は分らないし、仏教な
んか歩けないというのが凡夫です。その凡夫に仏様の方から、本願
によつて教・行・信・証を私たちに与えてくださつて、私たちに仏に
なる道に立たせてくださる。そういう他力の仏教が「浄土真宗」とい
う仏教であると親鸞聖人は最初に宣言しているのです。

こう言うのは、今申し上げましたように、一代仏教、浄土教以外の
聖道門から法然の『選択集』が非難されて、そして法然の『選択集』
が明恵が書いた『摧邪輪』によつて非難される。その内容に答えてい
ると考えても間違いありません。明恵がこれと同じように非難する
わけです。凡夫は仏教には立てない、だから凡夫なのです。凡夫が
仏教なんか分かるかと。だから凡夫なのでね。分かるわけがないと
いうことに対して、親鸞聖人は、「違うのだ。阿弥陀如来ということが
さえ分かれば、阿弥陀の本願力によつて、凡夫が仏道に立つことが
できる。それが浄土真宗という他力の仏教なのだ。」というふうに、
まず最初に宣言していることとなります。そして、

真実の教を顕さば即ち『大無量寿経』これなり

「それ真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり」。

いい言葉ですね。他力の信心、本願力回向の信心ということを読
んでいる経典は『大無量寿経』以外にありません。いいですね。先ほ
ど本願の成就文を読みましたね。「あらゆる衆生、その名号を聞き
て、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまへり。
かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得て不退転に住す」。
至心に回向せしめたまへり。本願力の回向の信心によつて浄土に生

まれる。こういうことを説いているのは『大無量寿経』以外にないから、ここに『大無量寿経』これなり」と。「真実の教」だと。

これも申しあげたかもしれないませんが、一代仏教から言えば、真実を説いている経典は『法華経』です。その『法華経』に対して、『**真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり**』。これはやつぱりね、私たちは今はなんともないでしょう。これね、はつきり言うけど殺されますよ。法然は結局は殺されたのですからね。流罪になって、そして流罪から許されてすぐに死んでしまった。だから結局法然上人は流罪で亡くなったということになります。

法然上人に弟子が言うのよ。もう私たち一生懸命に念仏を称えて、大切なことを伝えてきた。だけでも結局流罪になって殺される。だから、土佐に流されて行くときに、すがり付いて「お師匠様、もう念仏やめてください」と弟子が言うのよ。そうしたら、法然は「はねるのは首だけだろう、念仏の命まで殺せないだろう」と言って、いくら言っても念仏をやめなかつたのですよ。まあ大したものやと言うか、命を捨ててるわけですね。

そうだろうと思いますけれども、親鸞聖人も、やはりこういうものを書くというのは当時は、比叡山はものすごい権力集団、武力集団ですから、あそこの日吉神社に行ったら分かるでしょう。ものすごく大きな神輿があります。あの神輿を担いで暴れるわけです、僧兵どもが自分たちが気に入らないことがあると、あの神輿を担いで街に出て暴れるわけです。なぜなら神社奉行しか取り締まれないから、街に出て行くと、坊さんたちが神輿担いで暴れだすと、「やめろ」と言う人がいないのです。神社奉行しか取り締まれないからね。そういうふうにして、自分たちの思いを通すというので、むちゃくちゃするわけですよ。武力集団ですよ。

そういう状況の中で法然も死んでいったわけです。だから、そういう中で親鸞も『教行信証』をよほどの覚悟をして書いたに違いない。しかも、今言ったように『法華経』があるにもかかわらず、ここに「**それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり**」と言うわけです。そうすると、もう明らかに『法華経』・天台宗と対峙してこれを言っているわけです。だから、よほどの覚悟がいったと僕は思いますけれども、こういう文章があるわけです。

分別を超えた一如の世界

そして「この経の大意は」とあつて、

「阿弥陀如来が法蔵菩薩の発願、そして法蔵菩薩のご苦勞を開いてくださって、凡小を哀れんで法蔵菩薩が名号ひとつを選んでくださった」。これが法蔵菩薩、阿弥陀のはたらきです。

「お釈迦様はこの世に出てきて、仏教を明らかにしてください、群萌を救うために本願を説いてくださった」。

「**ここをもって、如来の本願を説きて経の宗致とす。すなわち、仏の名号をもって経の体とするなり**」。こうあります。宗・体によつて、これもよく考えてくださいね。二つ、阿弥陀とお釈迦様と二つありますが、二人いるわけではありませんよ。いるのはお釈迦様一人です。阿難がお釈迦様に遇つて、お釈迦様の教えに感動して、そしてお釈迦さまがこの世を超えた阿弥陀の世界を開いてくださった。その阿弥陀の世界が弥陀。だから二人おるわけじゃありません。分かりますね。

大学院の時に、私は、皆さんよく知っているでしょう、「二河白道の譬喩」がゼミの発表で当たったのです。一生懸命勉強をすればす

るほど、阿弥陀如来とお釈迦様と二人おるようになるのです。お釈迦様がこちらから「浄土に行け」と言ってくださっている。浄土から「汝一心に正念にして直ちに來れ」と言ってくださっている。勉強すればするほど分かれていくのです。おかしいなと思いつながら発表したら、案の定、松原先生に机たたかれて怒られた。「馬鹿たれが！」と言うて（笑）。しかし、ああいうところを怒ってくださるというのが、またありがたいよね。力いっぱい怒ってね、そして「馬鹿もんが！二人おるわけではない、そもそもお前は信心がどうやって起こるかという、その事実が分かるとるか」と怒られて、「信心の事実と頭で考えることは違う」と言われました。

そうですね、先生に遇って初めて阿弥陀の世界が開かれたと言つて感動する、その信心の事実と、それを今度は頭の中でこねくり回して「阿弥陀と釈尊と二人おつて、真ん中に白道が通っていて」なんて考え出すと訳が分からんことになる。「それが違うんだ！」と怒られてね。まあ申しあげていることは分かりますね。

だからこれも二人おるわけではないのです。お釈迦様を通して阿難が感動した世界が阿弥陀の世界だったわけです。この世にない世界です。分別を超えた一如の世界。それに感動したわけですね。こういうふうには、まず他力の仏教、そして弥陀と釈迦というふうに分けながら大意を述べておられます。

「出遇い」―他力の仏教の核心

前回、西藤さんが質問してくださった。僕はその質問の意味をひよつとして取り違えてたかもしれないと思つて、今日もう一度「この間は、あれは何を聞きたかつたの？」と聞き直したのです。単純に言うて「教の巻というのはお釈迦様と阿難の出遇いだけしか説か

れてない、だから、要するに他力の仏教というのはその出遇いだけなのか」と聞かれました。その通りです。出遇いだけ。出遇いの中に阿弥陀の覚り、阿弥陀の浄土を感得し、そして、出遇いの中にこの世を超えたものに救われていく、他力の信心に救われて行く、ということがあるわけで、出遇いしかない。

逆に言うて、いいですか、はつきり言うて「出遇いを通さないと仏教は分からない」というのが他力の仏教の特質です。この中にも「よく自分のような者が仏教に入れたものだ」と思う人もおるだろうし、逆に「自分はこんだけ一生懸命に勉強して、求めているのに何で仏教に遇えないのだろうか」と言う人もおるだろう。それが、実は自力の仏教でない証拠です。自分で努力をしても無理だから。人と出遇うというのは、これは努力せんといけないけど、努力だけでは出遇えない。出遇えたからと言つて努力が実つたかどうかは分からない。そこに自力の仏教でない証拠があるのです。だから「出遇い」ということが他力の仏教の核心になる。

これは僕が言っているのではなくて、例えば皆さんが知っている『歎異抄』だったら、「幸いに有縁の知識によらずばいかでか易行の一門に入ることを得ん哉」と書かれている。「幸いにも、先生にお遇いすることがなかったとしたら、自分のような者は他力の仏教に目覚めることはなかった」とちゃんと書いてあるでしょう。ですから他力の仏教、浄土真宗という仏教は出遇いしかない、と考えるもいい。その出遇いの中にさつき言つた阿弥陀の浄土が開かれ、正定聚に立ち、分別を超えた、善し悪しを比べるということを超えた感動を頂く、それが阿弥陀の世界ですね。ですから、ここからは他力の仏教の核心になるお釈迦様と阿難との出遇い、それが説かれていくことになります。

光明無量との出あい―地獄の因は自我にあり

もうこの間、くわしく読みましたから、さつとお話ししましょう。

『大無量寿経』に言わく、今日世尊、諸根悦予し姿色清浄にして、光顔巍巍とましますこと、明らかなる鏡、淨き影表裏に暢るがごとし。威容顕曜にして、超絶したまえること無量なり。未だかつて瞻観せず」というところから始まります。今日のお釈迦様は体中から喜びを発し、清浄なる清らかなお姿をして、お顔はヒマラヤの如く光顔巍巍と輝いて、鏡を貫き通すような光に満ちておられます。「威容顕曜にして、超絶したまえること無量なり」。そのお姿は過去現在未来を貫いて超絶している無量のお姿しております。これは分かりますね。「光明無量、寿命無量」です。ですから、どう言ったらいいかな、ぐだぐだ言わなくても分かるでしょう。仏教の先生に遇ったと言う時には光明無量、まずは光明無量です。

それぞれあるでしょう。僕はよく分からないけれども、皆さん、例えば、お茶とかお華とか、そういうものを丁寧に教えてもらう時があるでしょう。そういう先生に教えられることは光明無量とまでいなくても、たいへん大事なことを教えられるですね。それから大それたところ、やっぱりちゃんと学生の世話をしてくれる先生が流行る。ところがそんなことどうでもいいのです。それが理由であの先生に会ったなんて言う人がいっぱいおるんや。そんなことはどうでもいいのや。光明無量に遇わないと仏教に遇わんのよ。いいですか、僕が言ってるのと違うのです、そこにちゃんと書いとる。

阿難がお釈迦様に遇ったときに、まず遇ったのは光明無量。人間というのは生まれたときから「人間」になっている。だから、人間はここから先しか分らないのや。人間はものが見えんようになってい

る。もう「人間」になった時から「人間」を前提にしてもものを見ている。世界中そうです。テレビを見ていても何を見ていても、人間を問わないで、人間を前提にして前ばかり見ている。

例えば、戦争をしているとか、ここが核を開発したとか、どうしたとか、そういうことを全部前を見て言ってるわけやね。ところがお釈迦様の覚りというのは人間をはるか後ろに超えてしまっている。あまり同じようなことを繰り返してもいけません、皆さんが本当に苦しい時には、前しか見てないから、「あれが悪い」とか「これは悪い」とか周りの人を非難します。まさか自分のところに問題があるなんて誰も思っていないですね。いつも自分を立てようとする。自分と相手を比べて、勝つか負けるか、いつもそんなことを競い合っている。はつきり言う「負けたくない根性」が動いている。人間はだれでも、「それは自我というものの本性だから当然ではないか」と思っているかもしれない。だけど、お釈迦様だけは実はそこに地獄のもとがあると見抜かれている。

そういうのは解説すると「あ、そうか」と思うかもしれません。ところが自分の生き死にかかかって、親鸞聖人のように、「死んでしまおうと思っている時に、「地獄のもとはお前の自我にある」と知らされる、初めてそれが突き刺さる。すると、今まで思ってもない、世界がひっくり返る。本来比べる必要がなかったのだと分かる。本来勝ち負けなんて必要ないということが分かる。それぞれがそれぞれとして百パーセントなのだ、世界がひっくり返ってしまう。そういう教えを「光」という。

時間は「今」にしかない

「光明」というのは、なにかピカッと光る何かがあるわけではな

ますね。お釈迦様の中に阿弥陀仏を観ている。阿弥陀仏は「今現在説法」、今の仏です。だから阿弥陀仏の中に過去の仏も未来の仏もある、今の私はそれに遇ったのだというふうに、お釈迦様の中に阿弥陀仏を拝見していると、こういうことを言っているわけです。その阿弥陀仏も去来現の仏、永遠の仏である。過去現在未来を超えた永遠の仏であると。

こういうふうに阿難が感動を述べたわけです。これが「世を超えた」という感動を持った阿難の言葉になります。

お釈迦様の出世本懐の言葉

ところが、その言葉を聞いた時に、今度はお釈迦様の方が、（前回も申しあげましたように、これまで説いて来た仏教ならば、阿難は覺りを悟ってない、菩薩の五十三の位からするとずっと下の方におけるわけで、その阿難が、いきなりお釈迦様を「仏だ」とか「阿弥陀だ」とかというふうに言うわけだから）お釈迦様の方がびっくりしちゃって、「ちょっと阿難待て」「それ天の神様に聞いたのか、それとも（仏弟子の中で一番偉かったのは舍利弗だから）、舍利弗にでも聞いたのかね」と問うと、阿難が

「諸天の来りて我を教うる者、あることなけん。自ら所見をもつて、この義を問いたてまつるならくのみ」

「私が誰かから聞いて、言っているわけではありません。私が感じたままを申しあげたのです。」と言うと、

「善いかな阿難、問えるところ甚だ快し。深き智慧、真妙の弁才を發して、衆生を愍念せんとして、この慧義を問えり」

「よく問うてくれた。あなたは自分では分からないかもしれないけども、今日は修行ができない、覺ることができないそういう人達

でもお釈迦様が如来と分かる、そういう仏教を説く日がやっとなってきた。あなたが意識しなくても世界中の覺りを悟れない衆生を憐れんで、この慧義を問うてくれたのだ」と言つて、

「如来、無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したまう。世に出興する所以は、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり」。

これがお釈迦様の出世本懐の言葉です。

皆さん出世本懐の言葉くらい覺えておきなさい。それとも、これが覺えられないのだしたら、「自分が何のために生まれてきたか」という出世本懐の方を言ったらどうか。私たちは「仏の本願の教えに遇うために生まれてきた」のです。

皆さんは気が付かんとと思うけど、そうなのです。皆さんは分からないと思うけれども、私たちのような凡夫が、比べるということを超えて、最後には自分の人生に手を合わせて

「つらいことも苦しいこともいっぱいあったけど、うれしかった」と。

「これで十分なものになりました」と。私の先生のように、

「いのちを終わっていきける者までに育てられました」と。

そう言えるほど幸せなことではないでしょう。

だから分からなくても、私たちは本願の教えに遇うために生まれてきたのです。お釈迦様は本願の教えを説くために生まれて来たのです。

「無量億劫に値いがたく、見たてまつりがたきこと、靈瑞華の時あつて時にいまし出ずるがごとし」。つまり、阿難とお釈迦様のような出遇いは、これは浄土に何億年に一度咲く花、そのくらいしかな

い。「こんなことはないのよ」と言っている。あり得ないことが起こっているのです。そのあり得ないことの意味をこれから私が説くというのが『大経』です。

「今問えるところは饒益するところ多し。一切の諸天・人民を開化す。阿難、当に知るべし」と。今問うているところは、一切の衆生に大きな利益を与えるのだと。「一切の諸天・人民」みんな仏教に開化するのだと。

「阿難、当に知るべし」と言つて、前回言つたように、

- ① 「如来の正覚は」
- ② 「その智量りがたくして」
- ③ 「導護したまうところ多し」
- ④ 「慧見無碍にして」
- ⑤ 「よく遏絶することなし」

この①②③④⑤が五徳瑞現に匹敵する。

だから阿難が五徳瑞現を、阿難の言葉で言つたから、お釈迦様が「そうそう、その通り」と言つて、「あなたが言っていることはこういう意味よ」というふうに、ここはお釈迦様の方から五徳瑞現に匹敵する言葉を述べられた。ここが大事なところですよ。こんなふうにして『大経』が終わつていきます。

次に『如来会』は「阿難、仏に白して言さく」というふうには、阿難の間の方から始まっています。そして『平等覚経』は、阿難の問いに答える形で出世本懐経が述べられていきます。ですから私が『大経』のところでも申し上げましたけれども、救われた阿難の方がお釈迦様に出世本懐を述べさせたのだと。だって、お釈迦様はいくら偉い人でも救われた人が一人もいなかったら仏でも何でもないから、だから救われた方が「あなたは仏だ」と言つて、そしてそれに答え

て出世本懐を述べた。当然のことで、そんなふうには、ここは順番がそうなっています。そして最後に、五徳瑞現のことが憬興師の註釈で五つ述べられていきます。

真の仏弟子—金剛心の行人

そして最後にお釈迦様が述べられた五徳瑞現の中で、

「阿難当知如来正覚」、阿難当に知るべし如来の正覚は、という①のところは、

「すなわち奇特の法なり」と言っている。

②③がここでは省略されていると言いました。これまで、なんで②③が省略されているかということ詳しく書いたものはありません。けれども親鸞聖人が②③を省略したのだから意味がないわけではない。しかも逆に言えば④⑤だけ出している。

④は「慧見無碍というは、最勝の道を述するなり」。慧見無碍というのは、最も優れた道である。「最勝」と言うのは「最も優れた」という意味だけど、「この世を超えた道である」と言う意味です。言葉がないから、「この世を超えた」という道である。慧見無碍、「智慧で見た無碍道」、智慧で何を見たら無碍道になるのか、仏様の智慧によつて、何を見たら無碍道になるのかという意味です。「慧見無碍」、これは東聖典一九四頁を開けてみてください。「道」は無碍道なり。これはもともと『論註』の文章なのです。

『経』（華嚴経）に言わく、「十方無碍人、一道より生死を出でたまえり。一道は無碍道なり。無碍は、いわく、生死すなわちこれ涅槃なりと知るなり」

「生死即涅槃と知ること」これはもう大乘の覚りそのものやね。

「生死即涅槃を知ること」それが無碍道に立つということですよ。です

から『歎異鈔』でも「念仏者は無碍の一道なり」とあるでしょう。あれも障りない道、それはそうです。なぜ障りないかと言うと、生死、迷いの人生がそのまま仏様の世界であると知ること。うまく言えないけど分かりますか。迷いの人生がそのままで仏様の世界なのだと、だからどんなことがあっても、私の先生のように「私が頂いたのであります」と言っただけで引き受けて生きておられました。ああいうのだろうなと思いますけれども、ともかく、ここに、生死即涅槃と知ること、というふうにあります。

四番目が生死即涅槃と知ること、それからもうひとつ大切なのは、五番目が「無能遏絶」、よく遏絶することなし。これはダイヤモンドのような強い信念をいただくこと、これから皆さんと一緒に『教行信証』を勉強していく時に分かりますが、東聖典二四五頁、ここは大事故なところですから、これから何度も開きますよ。二四五頁の最初のところ。「弟子」とは釈迦・諸仏の弟子なり」と言うところがあるでしょう。ここに

「金剛心の行人なり。この信・行に由つて、必ず大涅槃を超証すべきがゆえに真仏弟子と曰う」というふうには、「真の仏弟子」。『教行信証』は「本当に『大経』の他力の信心が分かれば真の仏弟子になる」と言っているのです。ですから「信の巻」のところには、

「金剛心の行人」、これがひとつと、もうひとつは

「必ず大涅槃を超証する」、同じことです、

「生死即涅槃」。私たちの迷いの人生がそのまま仏様の世界であると頂いていける大きな信心の智慧は、必ず命終われば仏様の大涅槃の世界に帰って行く。だからひとつは「金剛心の行人」、もうひとつは「必可超証大涅槃」これも覚えてください。いいですか、試験に出しますよ（笑）。

ですから親鸞聖人は②③を省いて④⑤だけを残すのは、『大経』の仏教、浄土真宗という仏教は、最終的には真の仏弟子になるのだ、というのを「教の巻」のところ、ちゃんと前もって言っているわけですね。いいですかね。そんなふうには「教の巻」はなつておりますので、短いところですけども大変大事なところ。よろしゅうございませうか。ちよつと眠たかったですか。大丈夫？

「真仏弟子と言ふは、真の言は偽に對し、仮に對するなり」。真実の真ですね。これは、疑い、「偽」。あるいは仮に正しいという「仮」に對して「真」というのだと。「弟子とは釈迦・諸仏の弟子なり」。釈迦・諸仏の弟子という証拠は何かというと、「金剛心の行人なり」。この信・行に由つて、必ず大涅槃を超証すべきがゆえに真仏弟子と曰う。これ全部難しかったら、「金剛心の行人」と「必可超証大涅槃」、これが「真の仏弟子」の規定ですから、この二つは覚えてください。いいですか全部覚えなくてもいいです。この二つだけは覚えてください。試験に出します（笑）。それじゃあちよつとだけ休憩します。

《講義二》

臨終一念の夕、大般涅槃を超証す

それでは後半、もう少しお話をさせていただきます。先ほど申しましたように『教行信証』は、要するに単純な話です。「仏教が分かったらどうなるの？」と言ったら、「真の仏弟子」になると、親鸞聖人はそう言っていると知っておいてください。「真の仏弟子って何」と言ったら、ひとつは「金剛心の行人」。

これは例えば聖道門とか他の仏教の価値観に惑わされない、もう

ちよつと私たちから言うと、今の世間の価値観で本当によるべきものは何もない。だからそういう世間の価値観に惑わされしないで、ひたすら仏教の教えに生きて行こうとすることと考えてもいいです。それが金剛心の行人、金剛心というのは、ダイヤモンドのようなという意味ですから、ダイヤモンドのようなそういう強い信念を生きていくこと。

それからもうひとつは、「命終われば必ず仏様の世界に帰って行く」。

これは私の先生が亡くなる時に言った言葉でした。真仏弟子の一番最後の結核に、東聖典二五〇頁になりますけれども、「真に知りぬ。弥勒大士、等覚の金剛心を窮むるがゆえに、龍華三会の暁、当に無上覚位を極むべし」。

これはどういう意味かというと、自力で七地沈空の難を越えた八地の弥勒菩薩は等覚の金剛心を得て、そして五十六億七千万年の後に初夜・中夜・後夜という三つの会座を設けて、そこでたくさんの人を救って、やつと仏になると、こういう意味です。これはもうこんなふうに説かれているわけです。

それに対して「念仏衆生は、横超の金剛心を窮むるがゆえに」、これです。金剛心の行人、阿弥陀如来の本願力回向の信心を頂いているから「臨終一念の夕、大般涅槃を超証す」。臨終一念の夕に、この世のいのちが終わる時に必ず仏様の世界に帰って行くということ。

私の先生はこう言われました。「臨終一念の夕べに大般涅槃を超証する」という信念を『今』いただいているということであり「と。分かりますね。「命終わって必ず仏様の世界に帰って行く」という信念を『今』いただいているということが大切であります」というふうに先生は言われました。

そんなふうに、ここは『教行信証』でも一番、大変大事なところになつていくところですよ。そこに「金剛心の行人」と「必可超証大涅槃」、この二つを備えて真仏弟子になつていくところがあるかと押さえられています。だから、親鸞聖人は「教の巻」でも、それを言うために④と⑤を残したのだというふうに思われます。

よろしいですか？

今までのところで、「教の巻」で何かありますか、いいですか。

行の巻

それでは、「行の巻」に入っていきます。

「行の巻」は東聖典一五六頁を見ていただきますと、

「諸仏称名の願」、諸仏に私の名を称えられたいという願があげられます。そして

「浄土真実の行」、選択本願の行」。

「選択本願の行」の方はすぐ分かると思います。これは法然上人からいただいたお言葉です。

「浄土真実の行」、これは親鸞聖人の浄土真実の行。これからその内容に入っていきます。少し分かると思います。

文章に入っていきます。東聖典一五七ページのところ。皆さんと一緒に読んでみましょう。

「謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。この行は、すなわちこれもろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。かるがゆえに大行と名づく。しかるにこの行は、大悲の願より出でたり。すなわちこれ諸仏称揚の願と名づけ、また諸仏称名の願と名づく、また諸仏咨嗟の願と名づく。また往相

回向の願と名づくべし、また選択称名の願と名づくべきなり」。はい、ここまでですね。

大行

これは「行の巻」、「行の巻」というのは当然「行」ですね。実践の行です。それを表す巻ですから、ここは親鸞聖人がまず「行」について解説し、大切なところをきちつと述べているところですよ。ところが、この「行」と言っても、聖道門、あるいはもう少し広く一代仏教の「行」は、すべて人間の方から仏様の覚りの方に向かうという「行」です。

そうですね、皆さん「行」というと、やはりそういうふうになんとかイメージがあるでしょう。お寺の子供さんでも、「本山に修練に行っています」と言うと「ああ修行に行っているんですね」とご門徒さんから言われる。だから真宗でも修行というか、「行」という。そうすると、「行」というと必ず私たちの方から、衆生の方から仏様の覚りに向かうという意味で、一代仏教の「行」という言い方は「涅槃に向かう道」という意味で、「向涅槃道」というふうに言います。

これは前にも菩薩の五十二位のときに書きましたけども、人間の方から如来の覚りに向かう、人間から如来の覚りへ、という方向になつてゐるわけです。私たちの考え方もそうなつてますし、今でもそうなつてゐると思います。それは今日からやめていただきたい。だつて反対なのです。ここちよつと読みますよ。

「**謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり**」。つまり、仏様の覚りが私たちのものになるためには行信（『教行信証』で言えば行信）、ここに仏様の覚りが実現してくるものがある。だから「大行あり、大信あり」、と言つて、「**大行とは、すなわち無碍光如来の名を**

称するなり」。ここまでは分かりますね。大行というのは無碍光如来のみ名（南無阿弥陀仏）、「**帰命尽十方無碍光如来**」と書いてありますね。ですから「**無碍光如来の名を称するなり**」、ここまで分かりますね。

「この行は、**すなわちこれもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり**」。もろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり。

「善法」というのは、法蔵菩薩が出家をして、五劫思惟して四十八願を建て、そしてやがて浄土を建立していく、その法蔵菩薩のご苦労、それを善法といいます。

「徳本」というのは、私たちが、皆さんが念仏によつて必ず仏になつていくことを言います。

この二つが「**帰命尽十方無碍光如来**」の中に納まっているというふうに言うわけです。

それはしかしよく考えると『大経』にそう説かれていますよね。法蔵菩薩が世自在王仏のもとで出家して、どんな人も救われるように五劫の間思惟し四十八の本願を建て、どんな人も救われるように二百一十億の諸仏の国を見て回つて、そして凡夫でも救われるというところだけを集めて浄土にしてください。それによつて、私たちのような衆生は必ず仏になるということが決まっています。

だから南無阿弥陀仏の名前の中に、「**法蔵菩薩のご苦労**」とその「**結果**」、（結果ということになると「**智慧の光になる**」と言つても間違いない）、ともかく「**法蔵菩薩のご苦労**」と私たちのような「修行しない者が必ず仏になつていく」、という二つのはたらきが納まつている。

眞実功德と言うのは名号なり

まず解説よりも文章を読みます。

「極速円満す」。だから私たち衆生のところにすぐに仏様の覚りが円満して下さるのである。仏様の覚りというのは「眞如一実の功德宝海」である。だからこそ「大行と名づく」るのである。

「極速円満す、眞如一実の功德宝海」、これが善法・徳本のまあ証拠と言うか、善法・徳本が備わっている証拠として、私たちのようなところに仏様の覚りが極速円満す。そして

「眞如一実の功德宝海なり」。眞如一実の功德宝海というのは聞いたことがありますか。

『一念多念文意』、(東聖典五四三頁)、

前にもここは読んだことがありますけれども、ゆっくり読みますよ。

「眞実功德ともうすは、名号なり。一実眞如の妙理、円満せるがゆえに、大宝海にたとえたまうなり。一実眞如ともうすは、無上大涅槃なり。涅槃すなわち法性なり。法性すなわち如来なり。宝海ともうすは、よろずの衆生をきらわず、さわりなく、へだてず、みちびきたまうを、大海のみずのへだてなきにたとえたまえるなり」。これですね。

ここに「眞実功德と言うのは名号なり」とあつて、名号の中に一実眞如の妙理が円満しているために大宝海にたとえたまうのである。

「一実眞如ともうすは、無上大涅槃なり。涅槃すなわち法性なり。法性すなわち如来なり。宝海ともうすは、よろずの衆生をきらわず、さわりなく、へだてず、みちびきたまうを、大海のみずのへだてなきにたとえたまえるなり」。こうありますね。

ここにあるように、眞実功德というはたらきは名号のはたらきで

ある。一実眞如の妙理が名号の中に円満しているから大宝海に譬えられるのです。一実眞如というのは無上大涅槃である。涅槃は法性である。如来である。だから名号によつて、今すぐに如来のはたらきの中に私たちは生まれることができる。

「宝海ともうすは、よろずの衆生をきらわず、さわりなく、へだてず、みちびきたまうを、大海のみずのへだてなきにたとえたまえるなり」。こうありますね。

ですから名号に帰するということが起こった時に、名号の方から無上涅槃の、つまり私たちが比べるということを超えた涅槃のはたらきが名号の方から開かれて、まるで宝の海と言われるように、衆生を嫌わず、さわりなく、隔てず、私たちを包んでくださる。これが眞実功德というものであると、こういうふうに言っています。分かりますかね。

大宝海

名号に帰した時に、この中にさつき申しあげたようなことがお分りになりました人がおおると思います。私たちが苦しんだり悲しんだりする時には、この娑婆の価値観の中で苦しみますよ。そして間に合わない娑婆の価値観を振り回して、まあ自殺してしまうところまで追い込まれていきますけどね。その時に、この本願の名号のはたらきは「比べる」ということを破ると言っている。涅槃のはたらき、一如のはたらき、それは、私たちの過去、現代、未来と考えるような分別を中心にする考え方を破つて、本来比べる必要がない世界に私たちを解放してください。

そして「自分が自分でよかった」というものにしてくださる。同時に、「自分が自分でよかった」ということは、周りの人も周りの人で

百パーセントですから、周りの人も百パーセントとして尊敬して生きていくことになる。

これまでは横の関係で、娘とか、奥さんとか、そういう関係で見れなかったものが、如来と私で百パーセント、如来と奥さんで百パーセント、如来と娘で百パーセントというふうには、如来を通じて人間関係が回復されてくる。そういう一如、つまり涅槃の世界が名号の方から開かれてきて、そして私たちから言えば大宝海、大きな海のような仏様の世界に本来おつたのだと。

今でも皆さん仏様の世界の中におるのよ。自分の頭がいいから分かんようにしているのよ。頭が良すぎるんだ。だから自分で分からないようにしている。分かりますかね。

それが自分の頭が間に合わないようになった時に、初めて仏様の世界の方から開かれてくる。その次のページを開けてみましょう、五行目のところですが、

「大宝海は、よろずの善根功德みちきわまるを海にたとえたまう。この功德をよく信ずるひとのころのうちに、すみやかに、とくみちたりぬとしらしめんとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらず、もとめざるに、功德の大宝、そのみにみちみつがゆえに、大宝海とたとえたるなり」。

「大宝海」というのは、すべての善根功德が、仏様の善根功德が満ちきわまつて、海のように広い世界である。「この功德をよく信ずる人の心のうちに、すみやかに、とくみちたりぬとしらしめんとなり、しかれば金剛心の人は、知らず求めざるに、功德の大宝、その身にみちみつがゆえに大宝海と譬えたるなり」分かりますね。

人間を超える道

あのね、誤解を恐れずに申しあげますと、今のところが、凡夫の身のままの救い、真宗の「覚り」です。

苦しんできたことをよく考えたら、全部、世間の価値観の中で苦しんできた。その世間の価値観が何も役にも立たない、それでもまだ世間の価値観しかないから、それしか考えられない。夜も寝られないし、どうにもならない、そういうことが続くわね。その時に、さつき言ったように、「負けたくない」というか、自分が「どうしても譲りたくない」という、その本性が地獄を作っている、そのことが自分の心に突き刺さった時に、初めて「人間というものは悲しいものやなあ」というか、「自我を生きていくということはつらいことやなあ」というか。

仏教というのは人間を超えようとする道です。人は自分のことを置いていて、よりよく生きようとか、自分の人生を豊かにしようとか、します。カルチャーセンターなんかに行く時、みんなそうじゃないですか、自分の人生を豊かにするための趣味を何かやったりとかね。仏教はそういうのとは違うのです。最終的には自分自身も徹底的に否定されるからです。人間は本当は仏教を聞く耳を持たんのです。ちよつとでも人から悪口言われたら夜寝られないでしょう。それが全面的に否定されるなんて言うのは絶対にはやです。

だから「不請の友」です。僕らは本当はお釈迦様を望んではないのです。韋提希のように、「私がこんな目に遭っていたら、阿難と目連だったら、友達だからやさしく慰めてくれる、だから、あの人たちだけでいい、お釈迦様は来なくていい」と言うのです。そしたら「そんなことを言っていたら死ぬぞ」と、お釈迦様が出て行くわけです。

仏教は自己否定、人間の全否定を通すのです。完全に否定される

ということを通して、自分の価値観が何にも役に立たない「大きな世界」がもともとあったことに気づく。

「大きな世界」、それは譬えて言えば「生まれてすぐの世界」と言ってもいいかもしれん。生まれた所も親も国も何にも選べない。だけど、ちゃんと生まれてきて「いのち」は引き受けている。最近親が殺すようなこともあるけど、それでも最後まで引き受けて殺されていく。

そんなふうに人間の「いのち」というのは、生まれてきた時には、何にも本来比べる必要がないし、だれとも比べないで、そして与えられたものを与えられたもののように引き受けていつている。それが四歳か五歳ぐらいになって「自我」が出来る、今度は自分の都合の方が勝ってしまうから、「いのち」の上に「自我」が出来たのに、「私のいのち」になってしまう。私の家内、私の子供、私の家庭、全部自分が中心になる。そうやって本来の世界と逆さまになってしまう。そういう私たちの価値観で自分の人生を考え、苦しんでいく。

それは仏様から見たら逆さまになっている。だから、今度は、その「逆さまになっている」ということをよく教えて、「地獄を作り苦しめているのはあなた自身なのだ」ということを教える。世界は、本来比べる必要がない世界、本来善いとか悪いとかがない世界、本来すべてのものが百パーセントのあるがままの世界、そのようなものとしてある。

その「真如一実」という世界を「名号の方が開いてくれるのだ」と書いてある。

大行―如来から衆生へ

だから誤解を恐れないように言いますが、これが真宗の親鸞の

「覚り」です。親鸞は凡夫だから「悟った」とは言わない。言わないけど、聖道門ではこれを「悟り」と言うのです。だけど親鸞は「悟った」とは言わない、凡夫だからね。だけどこれが「覚り」です。「覚り」がなかったら仏教じゃない。「凡夫のまま大きな一如の世界の中にある、名号がそれを開いてくれるのだ」と言っているでしょう。「どれだけ私たちが、出来が悪かろうがよかろうが、それを嫌わず簡はず、ちゃんと向こうから摂めてくれる。そういう向こうから開かれてきた一如・涅槃の世界、それを開くのが名号なのだ」というふうに言っているわけです。だから「人間から仏へ」という、これまでの発想じゃなくて、逆に「涅槃の方が名号として人間の方に来てくれるのだ」と、こういうふうに方向が全く逆になっている。このあたりに、今言った、凡夫がだれでも救われていかなければならない、凡夫が救われる仏教の、他力の仏教の、親鸞聖人の仏教の特質があります。

そういう意味では、これは聖道門では理解できない。つまり「行」の概念が違うから、行というのは「人間から悟りへ」というのが行なのであって、なんで悟りの方から人間の方に来るやと。なんでそんなことが起こるのやと。それが善法・徳本のはたらきです。これは今日はちよつと時間がないからこの次に詳しくお話をするけれども、なんで悟りの方から人間の方に来るのや、そんな馬鹿なことないやろうと。

いやそれは「法蔵菩薩が全部を救いたいと四十八願を建てて、そして名号ひとつにまでなつてくださった、法蔵菩薩のはたらき。そこに善法・徳本のはたらきがちやんと備わっているのだ。だからそれによって涅槃の方が私たちの方に開かれてくるのだ」というふう

に、全く行の概念が反対になっていきますから、今までの行の概念で間違えられてしまう。だから、親鸞は「行」と言わないで「大行」とは、則ち無碍光如来の名を称するなり」、こういうふうにならざる「大行」という言葉で表します。

「大」というのは「如来」を表します。「如来の行」と考えてもいいけれども、ともかく「行」と言っただけでは包み込めない、今までの概念ではとても表せない、だから特別な言葉を設けて、「大行」という言葉を設けて、如来の方から衆生の方に開かれてくる、覚りの方が開かれてくるのだと、名号によって、なんでかという善法・徳本ということが備わった名号だからだと。つまり名号は法蔵菩薩のいわれが備わった名号だということです。この辺はなかなか難しいと思いますけれども、親鸞聖人のおっしゃっていることはそういうことです。

なぜ名号を因と果に分けるのか

大学院の学生の時に、私は、まあ意地の悪い先生がおりまして、名前を言うのはあれですけども、広瀬果というのですが（笑）、その先生が意地が悪いというのか、半年ゼミをやらされて、要するに前期全部終わると、「次またやってきてください」「えー」と。終わると「次またやってきてください」。しつこいというか、もうしまいに何もうつていかないで、「わー」と言っていましたけど。

その時に「親鸞聖人はなんで名号を因と果に分けるのですか」と聞かれたことがあります。皆さん分かりますか。名号を親鸞は因と果に分けるんです。知ってますか。いっぱいあるのですけどね、たとえば、今たまたま開けたところでは、東聖典五四七頁、終わりが六行目のところに「尊号ともうすは」とあるでしょう。そこに「南

無阿弥陀仏なり」。これはまあいいですよ。その次「尊はとうとくすぐれたりとなり」。これもいいでしょう。

ところが、「号は仏になりたもうてのちの御なをもうす。名は、いまだ仏になりたまわぬときの御なをもうすなり」。こんなふうにならざる「名」と「号」に分けて、「名」が因、「号」が果というふうにならざるに因と果に分けて説明するのです。これはここだけじゃなく他のところにもいっぱいあります。それを学生の時に「親鸞聖人はどうして名号を因と果に分けるのですか」と聞かれて、答えられなかったのです。誰か答えられますか。その時すぐに答えられなくて、次の時間にも思ったことを言いましたけども。

まあ単純に言うると、凡夫が凡夫のまま救われるために名と号に分けた。「名」は、因の方は法蔵菩薩のご苦勞でしょう。それは私たちが凡夫であるということを知らせるためです。「果」の方は光明無量、寿命無量と言ってもいいでしょう。その「果」のはたらきよって覚りの中に包み込むためです。

そんなふうには、例えば逆に言うると、いいですか、聖道門だったら覚りを悟るわけでしょう。果の悟りだけでいいのです。果の悟りだけあるわけで、それを「手に入れなさい、頑張んなさいよ」と言っているだけの話だから、果の悟りだけでいいわけです。悟れなかつたら、「それはお前修行が足りんからや」という話になる。

ところが「凡夫を凡夫のまま救う」というのにどうするかというね。それはなかなか難しいんですけども、まずは一切の人を凡夫に帰らせる。みなさん、凡夫に帰ってなからうが。なんか中途半端な凡夫やろうが。都合が悪い時だけ「凡夫や、凡夫や」と言つて。酒飲みに行って、げる吐きながら「いやー、やっぱり凡夫や、しゃーないなー」（笑）みたいなこと言つて。都合が悪い時だけ凡夫と言うのや。

そして、そうかと思うと、また頑張つて偉そうになりたいわけです。なんかよう分からんというか、要するに「凡夫」になつてないので。だから「有無を言わず凡夫だ」というところに引き戻す。そのために法蔵菩薩の五劫の思惟と兆載永劫の修行があるのです。

凡夫に帰る

皆さん、一回「凡夫」に帰つてごらん。「ああ、やっぱり本当に凡夫やつたんや」と帰つたら、「仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけり」と言うでしょう。自分が凡夫やと分かる前に、仏様の方が先に「凡夫や」と言うとなつた。なんで今まで気が付かなかったのかと。あの九章の言葉はなかなかいい言葉ですよ。「仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば」。

仏様の方が先に五劫も思惟して「煩惱具足の凡夫」と言つていたのやから。私が今凡夫と気付くよりも前に言つていたのやと気付いてみれば「申し訳なかつた」と言つて頭を下げる。まず凡夫を「凡夫」に帰す。そして、無量寿・無量光という光によって、私たちの分別を超えた涅槃の海のような、(この「海のような」というのが浄土教の覚りの特質やと思つてください)つまり、海のように「外から包んでいる」と言う、自分が「覚つた」とは言つてない。「海のように外から仏様の悟りが包んでくださっている」と言つている。

だから、親鸞聖人の場合「大宝海」というのは何遍も繰り返される。そして皆さん、これを言つてくれた人は偉い人やと僕は思いますが、

「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」(仏の本願力を観ずるに、遇うて空しく過ぐる者なし、能く速やかに功德の大

宝海を満足せしむ)、世親菩薩がそう言つたわけですよ。だから世親菩薩が、あれが浄土教の覚りを一番最初に偈にしてください。だからあそこを親鸞聖人は解説しているのです。

誤解を恐れないで言うと、そういうことになります。これは実は聖道門で言えば悟りのことだと。けども凡夫の仏道だから「悟り」と言わないで「大宝海」、海のような悟りのはたらきに包まれたと、「大宝海」と言うのであつて、「大行釈」ここに親鸞聖人が述べている、大行のはたらきがあります。つまりこれまでのように、一代仏教のように「人間から仏様の悟りに」というのではなくて、逆に「仏様の悟りの方から人間の方に」来てくださっている。一代仏教の「行」の概念をまったく逆さまにひっくり返して、そして言葉も「大行」という言葉で表している。それが「行の巻」だというふう知っておいてください。そこに他力の仏教、つまり「凡夫がそのまま救われる仏教」があるのだということ。ここが大切なところですよ。

ちよつど時間になりましたが、いかがでしょうか。

ちよつと難しかったかね。

それでもなからう。

難しい？

《質疑》

【質問一】

(質問者) ありがとうございます。今日はちらつと出たことなのですが、前回の講義録をいただいて、それを見て疑問に思ったところがあるのです。

それは菩薩道という五十二階のところに「七地沈空」というのがあります。先生の著書『親鸞の主著『教行信証』の世界』ですと四十頁のところに図が書いてあります。この表を見ると十地の中に七地沈空というところがあります。今日も「凡夫のまま救われる」というお話がありましたけれども、この表を見ると十地というのは菩薩のところに入っている。下から十信のところが「外凡夫」、次の十住、十行、十回向のところが「内凡夫」、次の十地から「菩薩」。そこに「七地沈空」というところが出ます。向涅槃道というようにすることで、「昇っていくという考え方をやめてください」というようなお話がありましたけれど、「凡夫のまま救われる」と言った時には、その七地沈空というところが問題になるのか、どうなのかなと思つて。

(先生) 『大経』という經典は、これは皆さんせつかくだから知つておいてほしいのですが、对合衆(对合衆というのはお釈迦様が説法する相手)、相手が私たちの所依の聖典ですと、お釈迦様の直弟子たちの五比丘や阿難を中心にするグループ、それがひとグループです。

ところが『大経』には異訳の經典があり、異訳の經典の『平等覚経』を見ますと、その中に優婆塞、優婆夷という、いわゆる在家の信者、在家の皆さんのような女性・男性、それも含まれています。ですから、ひとつは阿難を中心にするグループ(凡夫も含む)。もうひとつ

は、大乘の菩薩たち、観音、勢至、それから弥勒菩薩、そういう菩薩たち、そういう二つが『大経』の対合衆です。

ですから誰もこれを用意してませんけれども、例えば先ほど言いました第十八願成就文、本願では一番大切な十八願の「あらゆる衆生、その名号を聞き、信心歓喜せんこと、乃至十念せん。心を至し回向したまへり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す」。これね、普通、凡夫の救いだけなら、「往生をうる。」。「。」でいいと思います。ところがわざわざ「往生を得て不退転に住す」と。不退転というのは、これは大乘の菩薩道の悟りですからね、それを二つ並べて書かれているでしょう。

つまり『大経』というのは、そういう凡夫が救われるということと、それから大乘の菩薩たちが救われるということと、第十八願によつて、どっちとも救われるということと。

「救われる」という言葉がおかしかったら、大乘の菩薩が菩薩道を全うする、十八願によつてね。それから凡夫は浄土によつて救われる。その二つともが阿弥陀の本願によつて実現されると説かれるのが『大経』だと知っておいて下さい。『大経』という經典は普通の經典ではない。とんでもない經典で、そういうことを知っておいてください。それから、それをよく知った上で、菩薩道を凡夫の仏道に転換した曇鸞のところをよく勉強すれば、今君が言っていることはそこで分かる。

けど、今はその時間がないから、はつきり言うけど、菩薩道の段階、それは曇鸞が言っているようにお釈迦様の方便です。この世界で、私たちの娑婆で仏教を説こうとすると人間は必ず比べるということがもとなつているから、だから低いところよりも高いところ、高いところよりもつと高いところというふうな頭になつてくるか

ら、それをもとにしながら、お釈迦様が方便として説いたので、仏教の悟りというところからすると、こんなものは方便だと書いてある。そしてこんな階段みたいなことでございちゃございちゃ言っている奴は仏教が分からん奴やと書いてある。これは僕が言っているのじゃない(笑)、曇鸞が言っているのです。「階段を下から昇るとか、上から昇るとか訳の分からんことをまだ言うような馬鹿がおるのやつたら、それは仏教が分からん奴だと言え」とちゃんと書いてある。だから方便なのです。なぜ方便になるのか、『論註』を讀め。『論註』の「不虛住持功德」のところに書いてるから。もし説明してというのなら、この次にでも説明してもいいけれども時間がかかるぞ。それでいいか。

つまり凡夫は、凡夫が救われるということを菩薩道の段階の中で考えたらいけないということです。そんなところに段階があるじゃないかなどと言いだしたら混乱してしょうがないから、そんな段階の中で凡夫が救われるということを考えたら、訳が分からなくなるように決まっているのだから。それは方便なのだと言っているのだから、その場合には、段階で考えるのは菩薩道の方。七地沈空をどうやって越えるかという菩薩道の方はそれで考えなさいと。けど、「凡夫が救われる」という場合には、それは「方便なのだからいらない」とちゃんと言っているから、「段階で考えたらだめ」ということよ。分かることが分からんようになるということですよ。

(質問者) そういう意味では、自分においては七地沈空ということは問題にしないでいいということですか。

(先生) そうそう。だってお前、七地とはどんなとこやと分かっているのか。なんでお前のところで七地が問題になるの。そっちの方を聞かせてほしいわ。どうということ。お前は十信まで行ってないん

やぞ。きつき「外凡夫」と言うのとつたけど、ちがう、あれ、「げぼんぶ」というのや。お前、外凡夫までも行ってないんやぞ、それがなんでも七地が問題になるの。

(質問者) 自分が聞法をしてきた中で、「ここまでは自力で頑張らなくてはいけない、だけどそこからはやはり自力の限界だから」というようなお話を聞いたことがあつて、なんかそういういつた段階があるのかなあと。

(先生) それはあるかもしれないけれども、それが「七地」というわけにはいかないでしょう。時々そういうふう勘違いしている人がいるのです。専修学院にもいた「僕、七地なのですけど」と言つて(笑)。明後日みたいな顔しとつたけどな。それは七地なんてとんでもない。七地は菩薩なのです。だから自力の限界ということを考えてるには、それは確かに自力の限界というのはそこで考えられているわ、菩薩として。しかし、それはいいか、百八ある煩惱を全部捨てて、最後まで全部煩惱を捨てたと。そして求道心、菩提心だけ残っているところ、七地のところで、「その菩提心も煩惱だ」と言われるのです。

お前は煩惱のかたまりでしょう。私もそうやけど(笑)。だから、まずはいいか、この五十二位のところで凡夫が救われるということを考えてらいたくないということ。お前自身のこともその中で考えるな、ややこしくなるから。それは曇鸞の『論註』を一回よく読んでみたらいいのや。すると凡夫が救われるということがどういふことかということが分かってくる。だからそこ(五十二位のところ)で考えない方がいい。

【質問二】

(質問者)：すみません、私ずっとお話を聞いていて、ちょっと気になった言葉なのですが「死ぬときに分かる」ということを先生今日もおっしゃいましたが、「死ぬときに分かる」というのは、分別がなくなつてから分かれると考えるのでしょうか。

(先生)あのおう、僕の口癖ですみません(笑)。誠に申し訳ない。ただ『観経』には「下品下生」のところで、命終わつていく時に、「仏様のことを思いなさい」と言つと、「いやいや、それはもう仏様のことを思うほど余裕はない」と。痛いわけで。「それなら南無阿弥陀仏を称えなさい、そうしたら必ず仏様に救われるから」という。『観経』の下品下生のところは、今申し上げたように、命終わつてからの救いというふうになつていきます。けどもそれは『観経』の方便なのであつて、親鸞聖人が『教行信証』で語つた救いは、『大経』の「今の信心」に救われていく。これが親鸞聖人の立脚地です。だからそういう意味で、『観経』では「死ぬ時に救われる」と書いてるけど、『大経』では「今救われよ」と言う。「まあ死ぬとき分かる分かる」と言つてみたりするのは一つは『観経』があると思います。

それから、せっかくそう言つてくださったから申しあげますけれども、何年か前に、私は仙台に話に行つていて、住職が、まだ僕よりも若かつたですけど、ガンで「もう僕だめなんです」と言つて「来年の報恩講には、もう会えないかもしれない。余命があと五か月だといわれました」と。「けど、僕は何とかして頑張つて、先生ともう一回会つて死にたい。そしてご門徒さんにもお礼が言いたい」と言つていたのですが、生きていたのです。

次の年に行つたら。けどもう危篤状態でね、もう骨と皮だけ、そ

して顔も蟬人形のような真っ白の顔でした。言葉も何と言っているかよく分からぬ。奥さんが「はー」と言つて聞くのですが、その時にこう言われました「生きることと死ぬことは一如です。みなさんありがとう。南無阿弥陀仏。」と。「ああ死ぬときに分かるのだなあ」と思つた。

つまり、あんまり分別がはたらかなくなつてきて、そのまんま命のまんま言つているという感じがしました。だからものすごく感動しました。そして僕の話になるから帰つてくださと言つたら「いやだ」と言つて帰らないのです。僕の身にもなつてくださ、たまたまもんじゃありませんよ、そんなもの。だけど一生懸命しゃべつたら、それから二日後でしたか亡くなられました。だから死ぬとき分かるつて。まあ冗談ですけど、『観経』に書いてあるのは、こういうことを言っているのかなと思ひました。

【質問三】

(質問者) 私が称える限りは、どんな称え方をしようと仏様の行は成就しているわけですよ。称えてこの行が成就、私の上でもみんなの上でも、してるのですけど、それからが難しい、それからどうしたらよろしいのでしょうか。

(先生) それはちよつと読み違えているのところがいますか。「往相の回向に、大行あり、大信あり。大信に裏打ちされた大行は無碍光如来のみ名を称するなり」。大信というものが感得している世界が善法・徳本です。

(質問者) 背景に大信がない大行は、先生が今言われていることに入つていないということですね。

(先生) そうです。

(質問者) 信に裏打ちされていない大行を続けても。じゃあどうすればいいのですか。

(先生) 大信、大行大信ということが大事なのでしょう。行信の発起、それが大事なのでしょう。もつと言えば信心、「弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず。ただ信心を要とすとしるべし」。ただ信心は君の責任。

(質問者) 信心も仏様の責任じゃないのですか。

(先生) 君の責任(笑)。

(質問者) だから、そこで大行をしてるんだけど、そこでまた元に戻って向涅槃道が自分にしみ付いているから、この大行をずっと続けとたら信がいただけと思つて、ほとんどの人がしてると思うのですよ。だけど先生は、「いや順番が違う」と。その大行をするときに、大信が備わってないとだめだと言うわけですね。

(先生) うん。そうそう。

(質問者) そうするとややこしい。

(先生) それは当然そうです。本願の成就文でも、十一願の成就、十七願の成就とあつて、一番最後には、第十八願の成就文。「ただ信心を要とすとしるべし」。

その信心がなければ念仏しても空念仏ではないかと言つたのが明恵です。だから明恵は君より賢い。確かにその通りです。法然門下で法然は「念仏ひとつでいい、念仏ひとつでいい」と言うのです。『大経』だつて念仏ひとつで読むのです。そうすると、第十八願を「念仏往生の願」と読んで、念仏往生の願だと読むわけだけど、明恵は「何を言うとするんや」と。「あらゆる衆生、その名号を聞いて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん、ではないか」と。「乃至一念という念仏は、信心歡喜がなかったら空念仏になるではないか」と言つて批判する

のが明恵です。それは正しいのです。その通りです。その通り、正しいんだ。

その意味では親鸞聖人の『教行信証』と明恵とはある意味で言えば立場は一緒です。信心が大事だという立場は一緒。ただ明恵の場合には自力の信心を言っている。親鸞の場合は他力の信心を言っているというので違うけどね、だけど「信心が大事だ」という点においては一緒。「行信」という場合に必ず、だからさっきの文章でも必ず「行信」と言つていて、そのうえで「行」ということを規定しているわけだから、信が裏打ちされていないものは行にならない、という意味です。

(質問者) これから先は怒られるかもしれないのですが、それでは大行するときの信はどうしたらいたただけるのでしょうか。

(先生) それは君の責任や。

(質問者) そうですか、仏様の責任ではない？

(先生) 違う、違う。

(質問者) 簡明なお答えの先生にしては、えらい突き放している言い方ですが(笑)、もうちょっと何か。

(先生) いやそこは、どう言うてやりようもない。それは君の聞法の苦勞だし、聞法の歴史とかいろんなものがあつて、その苦勞で、まあどういう形で君が信を得るか、さっき言つたように、どこで信を得るか私なんかには全く分からないから、そこに他力の仏教がある。だから「君の責任や」としか言いようがないのです。

【質問四】

(質問者) お願いします。前回の質問三のところ、一如の覺りの中に包まれた、凡夫のまま包まれたというか、大宝海に包まれたと

ということが、聖道門の悟りと一緒だということをおっしゃったので、すけど、まあ浄土真宗、浄土教の方ではそういう表現をされるけど、聖道門の方ではどういう表現というか、どういう状態が、それと同じような悟りになるのかなと思つて。

(先生) ああ、例えば、親鸞聖人の言い方、聖典で分かるようなこととでいうと、

「生死即涅槃を証知する」、「生死即涅槃を覚る」とか、

「煩惱即菩提」とか、

これは大乘の旗印です。「煩惱即菩提」、「生死即涅槃」、これは覚りの名前です。

(質問者) それとついでに、同じところの下の方に、「信心によって生死即涅槃を証知するというふうに表示します」と、「この場合は、悟るということと決定的に違うということを親鸞聖人ははっきり分けています」と。これは浄土教の方の信心によって生死即涅槃を証知するという表現ですね。これは聖道門とは違うということですね。

(先生) 違う違う。

(質問者) そのところは違うのですか。

(先生) 本願によつていただく覚りです。ですから最終的には、これはまた、難しい問題になると思いますけども、二十願の私たちがどうしても抜けない自力。仏教が分かっても抜けないし、分からなくとも抜けない。要するにどっちにしても抜けない自力。仏様はこれをどう助けるかが仏様の責任。だからそれを十八願で助けるというふうに言っているわけです。だから二十願と十八願を紙の裏表だと見抜いたのが親鸞の凄いとこです。だから二十願を「果遂の誓い」と言つて、十八願でそのまま救い取ると、救い取るのは仏さんの仕

事だから私に任せておけと言つて十八願で救うのやと。だからここに「生死」と「涅槃」とがひとつになつていゝのです。それは本願によつていただく、「証知する」のだと。悟るといゝのではなくて、「本願によつていただいた生死即涅槃なのだ」といゝのが、そこだと思ひます。

(質問者) 「本願によつて」といゝこと、そこが違ふといゝことですね。

(先生) そうです、そうです。そこが大事。決定的に違ふ。

※「恩徳讃」のあとで、先生の独り言……

ここ、獲得名号のあれですけど、「自然法爾章」に、「名の字は、因位のときのなを名(みよ)う」といゝ。号の字は、果位のときのなを号といゝ」と。ここに因と果とちやんとあつて、ほかのところにもあるのです。ですから、ここで、いきなり僕、因と果と書いたけど、実は、こつちの方が正確かなと思つてます。いや申し訳なかつたですね。

^^ メールでの質問 ^^

(田畑先生) 先生の著作『親鸞の主著『教行信証』の世界』の中で「ざとりをさとる」といゝ場合の漢字を「覚りを悟る」と書かれています。「覚り」と「悟り」の使い分けについてご教授下さい。

(延塚先生) 言葉上の使い分けは本来ないと思ひます。どちらでもいいのですが、修行によつて悟ると使ひますので、私は明らかに自力で悟るといゝ場合には、「悟り」を使つています。それに対して「ざとり」と名詞で使う場合には「覚り」を使つています。これも私の大まかな使い分けで、それほど気にされなくてもいいかと思ひます。

文責は編集者の田畑正久にあります。